Vol.42
2002 SPRING

木曽川文庫

KISSO

木曽川文庫は治水の資料館。
水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、
これからの治水を皆様とともに考えていきたいと思っています。
春号は木曽川左岸にひらけた江南市から
その歴史や治水・用水事業を中心に、
今回から特集する内水対策では、
近世の内水被害とその対策をご紹介します。

INDEX……

ふるさとの街・探訪記《江南市》
◆木曽川とともに歴史を刻む、江南市
AREA REPORT
◆青木川放水路と江南市の未来プロジェクト
気ままにJOURNEY
◆苦難を夢に変えていく英雄たち。その青春の舞台。
歴史ドキュメント
◆近世における悪水問題とその対策
TALK&TALK
◆輪中と悪水湛水
民話の小箱
◆清水のお菊

国土交通省中部地方整備局
木曽川下流工事事務所

木曽川とともに歴史を刻む 江南市

木曽川左岸にひらけた江南市は、肥沃な扇状地。
尾張と美濃の境界線となっていた木曽川は、幾多の合戦の舞台になりました。
鎌倉幕府打倒をめざした承久の乱では、草井の渡しが合戦場に。
戦国時代には、若き信長や秀吉が、天下を夢見て、この地で青春を過ごします。
太平の江戸の世には、御囲堤や宮田用水など、治水・利水事業に相次いで着手。
草井湊や宮田湊は交通の要地として繁栄しました。
大正時代、名鉄犬山線が開通すると、繊維産業などが発展。
現在では、「生活環境創造都市」を基本理念に、環境にやさしいまちづくりを推進しています。

江南市空撮

木曽川左岸に広がる扇状地

木曽川を中国の揚子江に見立て、その南側に位置することから名づけられた「江南市」は、木曽川の恵みを受けた肥沃な扇状地です。扇状地には木曽川の分派流の一之枝川（石枕川）二之枝川（般若川）三之枝川（浅井川）が放射状に流れており、幾度かの洪水や河川改修などで川の流路はしばしば変わっています。

肥沃な土壌と温暖な気候により、花卉・野菜を中心とする農業と繊維産業が発展。名古屋市から約二〇㎞圏に位置し、公共交通機関で約二〇分で結ばれるなど利便性が高く、早くからベッドタウン化が進み、岐阜県側の地域との交通結節点ともなっています。平成一六年には、市制五〇周年を迎えます。

二子山古墳

音楽寺遺跡の出土品

壬申の乱と村国男依

古くは先土器時代より、人々が狩猟や採集をしながら生活をしていたと思われますが、この時代の遺跡は江南市では発見されていません。縄文時代から平安期にかけての遺跡は市内の三三箇所に分布。扇状地の末端として、開発が古くから進んでいたことがうかがわれます。今なお残る古墳に二子山古墳、富士塚古墳などがあり、これらは古墳時代終わり頃に形成された前方後円墳。古代の豪族の存在を示唆しています。江南市は古くから中央との関係も深く、御厨、荘園が所在していました。古代国家が完成する前の壬申の乱（六七二）には、当地でも大軍が動員・従事。合戦で功労をあげた武将、村国男依は美濃国木曽川北岸各務郡村国郷の豪族で、南岸の江南の地、村国郷もその所領であったと思われます。村久野音楽寺は、村国氏の建立と考えられており、付近からは布目瓦、蓮華文瓦が出土。古い寺院の存在を物語っています。

承久の乱と曼陀羅寺

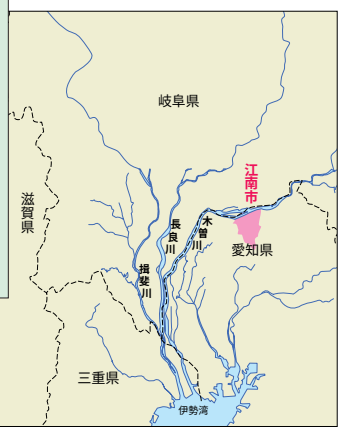
後鳥羽上皇が鎌倉幕府打倒の命令を発したことから、承久の乱（一二二一）が勃発。木曽川沿岸一帯が決戦場となりました。近世、渡船場としてにぎわった草井の渡しの起源は古く、都へ攻め上る鎌倉幕府の軍勢が渡ったと伝えられています。この木曽川の合戦で総崩れとなった上皇方は、宇治川の合戦でも破れ、乱は鎌倉幕府の完勝に終わりました。

江南市前飛保にある曼陀羅寺は、鎌倉幕府打倒をめざした後醍醐天皇ゆかりの名刹です。天皇の勅願により叔父の乗運上人により、元徳元年（一三二九）に建立されました。京都御所紫宸殿を模した正堂や、唐門などが造られ、その回りには一四の塔頭を配し、隆盛を極めたといわれています。現存する正堂・書院は国の重要文化財に、地蔵堂は県の有形文化財に指定されています。

武功夜話に見る、戦国武将の青春

南北朝の崩壊を経て迎えた戦国時代。江南市は織田信長、豊臣秀吉など、戦国武将たちが天下統一を夢見て、青春を過ごした所です。彼らの若き素顔に光を当てたのが、昭和三四年に吉田家から発見された古文書「武功夜話」です。吉田家の祖先は、豊臣秀吉の側近として活躍した前野将右衛門。この前野一族が記した文献が「武功夜話」。秀吉が信長に仕えていく過程や信長が尾張を統一するまでの合戦など、信長・秀吉に関するさまざまなことが詳細に書き残されています。

「武功夜話」によれば、秀吉が信長に仕えるようになったのは生駒屋敷



草井渡し跡

草井渡し（昭和当時）

での吉乃の口添えがあったからだと伝えています。生駒家は、馬借（運送業）を業とし、灰や油を商った豪族。小折集落に構えた生駒屋敷は、小折城ともよばれるほど広大なもので、その勢力を物語っていました。吉乃は生駒家の娘。信長の側室として二男一女を産んでいます。天下布武をめざした信長は、生駒家の経済力と商売で得る全国からの情報収集力に着目し、婚姻関係を結んだのでしょう。この生駒家とゆかりがあるのが、蜂須賀小六と前野一族が率いる川並衆です。小六は母の在所である宮後の安井屋敷に住む川並衆の棟梁で、配下は約数千人。尾張・美濃の国境の木曽川を舞台に活躍し、南蛮伝来の種子島（鉄砲）などで武装し、領主や地頭からもある程度独立した武装集団でした。秀吉は蜂須賀党や前野党などの川並衆の協力により、墨俣一夜城の築城を成功させ、出世街道の糸口をつかみました。

信長の死後、家康と秀吉が覇権を争った小牧・長久手の合戦で、秀吉陣営の木曽川越えに協力したのが、草井の船頭です。秀吉は褒美として門並役を免除しています。木曽川は関ケ原の合戦でも、戦場に。東軍の武将たちは曼陀羅寺に集まり、軍議を行っています。

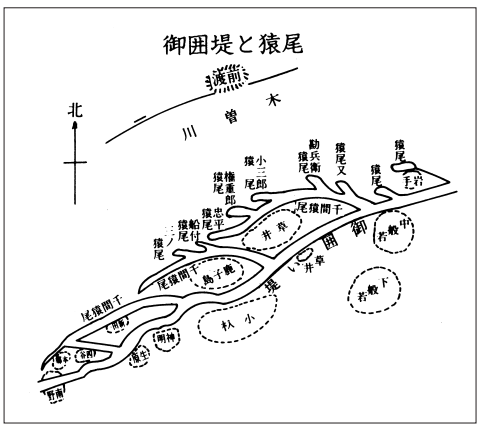
この関ケ原の合戦を前に、秀次事件に連座した前野将右衛門は自害。蜂須賀小六の嫡子家政は阿波一七万石の藩主となりました。

御囲堤と草井の猿尾

江戸時代の江南市には、三六の村があり、尾張藩領として小牧代官所及び北方代官所の管轄下に置かれました。

御囲堤の名で知られる濃尾平野の長大な木曽川堤防は、慶長一四年（一六〇九）に竣工。水害防御や交通路としての木曽川の機能の強化、そして西国への軍事防御ラインを目的に築造されました。

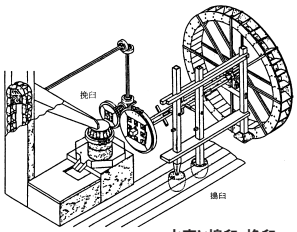
御囲堤は、尾張の国すべての村々を水害から守った訳ではなく、江南市の草井・鹿子島・宮田などの村は、堤の川側へ取り残されました。これらの村々を抱えるように御囲堤の川側にさらに築いたのが「猿尾」です。「草井の大猿尾」もこの時、築造されました。



御囲堤と猿尾

宮田用水と木津用水

御囲堤の工事の結果、木曽川から枝分かれしていた派川が締切られ水が流れ込まなくなったので、それらの河川は水源を失い、平地の排水河川となりました。このため、慶長一三年（一六〇八）、現在の江南市と一宮市の辺りにそれぞれ杁（木曽川から取水するための水門）を築造し、用水路も整備。現在の宮田用水の原形である般若用水と大江用水が完成しました。また、慶安元年（一六四八）には、宮田用水取入口の上流部から水を取り入れるため、木津用水を開削。明治時代には舟で名古屋へ物資を運ぶため、木曽川と庄内川を結ぶ水路としても利用されていました。



水車と搗臼・挽臼

水車業と木曽川舟運

御囲堤による木曽川の流路が定まってくると、木曽川の水を利用した水車業が発達。貞享二年（一六八五）、宮田の庄屋を務めた栗本平右衛門が水車による脱穀と精米、小麦等の製粉、綿実からの油の製造を開始しました。これらの産業に伴って、製品を運ぶ舟運業も成長を遂げました。

木曽川沿岸に位置する宮田は、水車業と並んで舟運業でも繁栄し、天保一四年（一八四三）には、三五艘ほどの「中鵜飼舟」が、穀物や油・粕などの生活物資を輸送していました。また、草井の渡しは、尾張と美濃を結ぶ交通の要地。草井村の舟が前渡（岐阜県）への米輸送や、名古屋からの味噌・たまり等を宮田湊まで輸送しています。しかし、昭和四四年（一九六九）愛岐大橋の完成により、渡船は廃止されました。

キリシタンの迫害

徳川幕府の政策に、キリスト教禁制があります。寛文七年（一六六七）には、かつて前野家がキリシタンだったことで、聞き書き「先祖武功夜話」を書いた前野千代女は、夫や姉妹とともに名古屋の千本松原で打ち首となりました。この年は、前野村だけでも五名の男女が捕らえられ、処刑されました。キリシタンの烙印を押されながらも、庄屋として生きのびていくのは並大抵のことではなく、当時の一九代茂平治雄武は尾張藩からもらっていたキリシタンではないという証明書「自分一札」を庭石にまで刻んで、家を守ろうとした歴史があります。

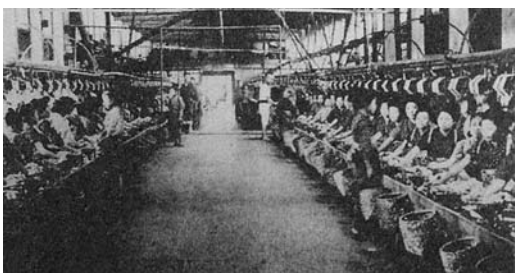
「当家ハ切支丹宗門ニ非ス」と刻まれた石

環境にやさしいまちをめざして

中世・近世を通して、江南市では養蚕が盛んに行われていましたが、明治中期以降、近代的な設備の導入により、製糸業が発展。大正末期には最盛期を迎えています。大正元年（一九一二）には、名鉄犬山線が開通し、地内に、小折・布袋・古知野（現江南）・宮後の各駅（現在、小折・宮後は廃駅）が開設され、周辺地域との結びつきが強くなりました。

自然災害としては、明治元年（一八六八）に入鹿切れが発生。犬山市にある入鹿池の堤防が決壊し、江南市では農作物に多大な被害がでました。これにより、年貢減免を求める動きも起きています。また、濃尾地震や伊勢湾台風においても、その被害は深刻でした。昭和二九年（一九五四）には、丹羽郡古知野町・布袋町、葉栗郡宮田町・草井村の四か町村の合併により、現在の江南市が誕生。肥沃な土地が支える農業をはじめ、インテリア織物を地場産業にもつ名古屋近郊の住宅都市として成長を遂げました。現在は、第四次総合計画の基本理念「生活環境創造都市」をめざし、環境にやさしいまちづくりを進めています。

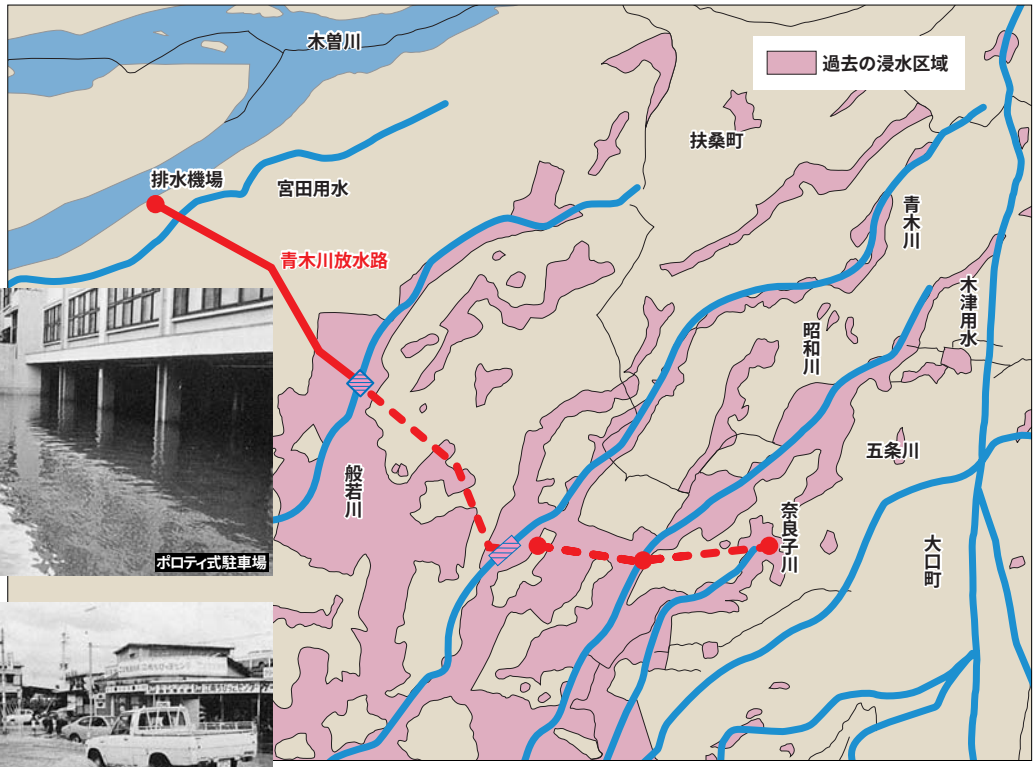
伊勢湾台風被害


明治37年創業の愛知館の工場内

■参考文献
『江南市制四五周年記念要覧』平成一一年江南市
『郷土資料江南』平成八年江南市教育委員会
『江南市史』本文編平成一三年江南市教育委員会
『こうなんの統計』平成一三年版江南市
『愛知県地名大事典』角川書店

青木川放水路と江南市の未来プロジェクト

木曽川の支派川が放射線上に流れる江南市。こうした小河川は川幅も狭く流路も短いことから、連年のように水害をもたらし、都市化の進展に伴って、ますます被害は深刻化しました。この水害を解決するために実施されたのが、青木川放水路の整備です。平成七年には一部が完成し、新しい治水施設として期待を集めています。また、江南市では環境事業を基軸とした未来プロジェクトが着々と進行しています。



ポロティ式駐車場

昭和51年9月江南市街地の浸水

青木川放水路

古知野を再び桃源郷に

木曽川は俗に「木曽七流」と呼ばれた暴れ川。古来よりしばしば氾濫を繰り返し、水害を引き起こしてきました。この木曽川が形成した砂れきの堆積地が犬山市を頂点とする木曽川扇状地です。ここでは木曽川の支派川である般若川、青木川、昭和川、奈良子川等の小河川が連年のように洪水を繰り返し、とりわけ、江南市においては深刻な状況。昭和五一年の豪雨時には江南市をはじめ、千三百haの区域で浸水被害が発生しています。

こうした水の脅威も一方では恵みの水に。江南市古知野町花霞一帯は、明治初年には桃林の中を般若川が流れ、花霞の里とも桃源郷とも呼ばれたほどの美しさでした。しかしながら現在では繁華な市街地となり、時間雨量が二〇㎜以上ともなれば般若川は氾濫し、この桃源を水浸しにする状況となっています。

特に平成二年には年九回もの浸水が発生しており、岐阜や名古屋の交通結節点である江南市の被害は局地にとどまらず、広域に及んでいます。

この桃源郷の名に値するには、毎年引き起こされている浸水被害を防御する必要があり、その切り札として青木川放水路の事業が始まりました。

青木川の現況

そもそも青木川は木曽川の一之枝川と呼ばれていました。大雨が降ると木曽川は氾濫し、蛇行する水の流れの跡が低水路となって、一之枝川、二之枝川などを形成したのでした。こうした小河川は幾度かの洪水や河川改修により流路が変更され、現在の青木川は二級河川・庄内川水系に。新川支川五条川の右支川として、一宮市・犬山市・江南市・大口町・扶桑町の排水を担っています。

青木川放水路の計画の背景には、急激に進んだ都市化の波が挙げられます。新興都市の出現は、治水面でも大きな弊害を起こすだろうと予測されたからです。田畑であれば地面にしみ込む雨水も、道路や宅地では逃げ場を失うことに。道路冠水や商店街への浸水は、そのまま隣接する地域へも流出することになり、浸水被害は年々増加の一途をたどりました。

青木川洪水状況

青木川の治水計画

青木川を含む新川流域は、総合治水対策事業に指定され、昭和五六年より工事は始まりました。

特に、青木川は川の容量が極めて小さく、ひとたび大雨が降れば、すべての降雨量を押し流す排水能力が乏しいため、大幅な河道改

修が必要となりました。

そこで流域内に治水緑地など水の遊び場を設け、降雨量のすべてが一挙に川に流れることを防ぐとともに、江南市中心部・扶桑町・大口町における浸水被害を軽減するため、青木川の支川である般若川、昭和川、奈良子川からあふれた水の一部を木曽川へ排水する青木川放水路が計画されました。

着々と進行するプロジェクト

青木川放水路の計画の大きな特徴は、地下水路であるという点です。一帯が新興都市という立地条件のため、新しい河道を整備するための用地取得が困難という理由から、この計画が採用されました。

放水路は約一五年の歳月をかけて、平成六年に一部完成。排水機場は平成三年から建設が始まり、平成七年には一部が完成し、新たな治水施設として期待を集めています。

放水路と調整池

洪水時には、般若川や青木川、昭和川、奈良子川からの水を放水路で、木曽川南派川へ送り、ポンプで排水します。放水量は最高二五m^3／s。排水にあたっては木曽川の水質に影響を与えないような施策を行っています。

また、それぞれの河川と放水路が交差する所には分水池や調整池を設け、より安全に水が流れるようにしています。

般若川調整池

調整池の機能は、治水面だけではありません。水辺にふさわしい自然の景観を創出することもその一環です。青木川の交差部に設けられた調整池も同様で、これらの調整池は洪水調節を図るとともに、普段は公園や運動場として開放、市民が集う広場としても愛されています。

排水機場の機能

放水路から流れてきた水を排水するために、木曽川南派川・小網橋下流の左岸に建設されたのが青木川放水路排水機場です。

最新の集中管理システムを導入し、豪雨や洪水などの状況を迅速、そして正確に監視。運転管理を情報面から支え、放水路や排水機場全体の中枢機能として、洪水時に大きな役割を果たしています。

ポンプ機

青木川放水路排水機場

■参考文献
『闘幻記―青木川放水路中間報告―』
平成五年愛知県
『しみず公園整備工事実施設計』
平成一三年江南市建設部公園緑地課
『国営木曽三川公園花卉園芸植物園基本計画の再検討の概要』
平成一三年国土交通省中部整備局

江南市の未来プロジェクト

《公共下水道、いよいよ供用開始》

五条川右岸浄化センター管理棟

下水道は美しい環境を守っていく上で、基盤となる設備です。江南市の公共下水道は、五条川右岸流域下水道に接続する流域関連公共下水道として、平成六年から工事を開始。一四〇haに及ぶ地域の下水道整備が始まりました。平成一一年からは約一九四haの追加認可を受け、工事を続行。現在、愛知県で工事中の五条川右岸浄化センターへ通ずる流域下水道第一幹線（布袋工区・木賀工区）は平成一四年三月に完成。江南市においても、平成一四年八月に待望の公共下水道の供用開始を予定しています。

《環境にやさしい、しみず公園構想》

青木川水源地石碑

潤いあふれた市民生活のためには、公園整備は大切な課題です。江南市では、第四次総合計画に基づいて、環境にやさしいまちづくりを展開。青木川の水源であった「前野の清水」を活用したしみず公園の整備も、この計画の一環です。

公園の総合的なイメージは、江南市の基本設計を基に小学生たちのアイデアを取り入れて作成。早くから環境事業に取り組む江南市では、小学校などが続々と花いっぱい運動や緑化事業に参加。そんな活動の中で、小学生たちはふるさと江南市の未来の姿を描いていったのでしょう。「しみず公園」の基本方針は、次の三点です。

「自然とのふれあいの場」

かつて、青木川水源地であった前野の清水の効果的な活用と青木川の水辺空間を生かしたビオトープ拠点の創出。

「地域の個性を演出する場」

近年まで湧き水が出ていたことと、かつて湿地であった計画地の原風景を演出。

「コミュニティ形成の場」

「清水のお菊」伝説など、歴史と自然を通して世代間の交流を図る場を創出。また新旧住民が世代を越え、気軽に憩う場を目的とする。

《花卉園芸植物園の整備促進》

花卉園芸植物園は、国営木曽三川公園尾張北部緑地江南拠点として、平成七年に計画されました。国際化と緑の博覧会の理念を継承し、他の都市緑化植物園との有機的連携を図りつつ、市民がゆとりとうるおいを実感できる花と緑豊かな美しい都市環境を創出することをめざし、中部圏における都市緑化に関する情報発信の中心拠点の形成を目的とします。

しみず公園平面図

曼陀羅寺公園

苦難を夢に変えていく英雄たち。その青春の舞台。

濁流する木曽川にはためく「卍」の旗印。
袖なし襦袢に茜色のふんどしで、木曽川一帯を荒らし回る川並衆は、大名でさえ恐れた野武士集団。
尾張の大ウツケと呼ばれた織田信長もまた、野党さながらに馬を駆り、天下取りへの夢をふくらませていった。
江南は、そんな若き戦国武将たちの青春の舞台。
生駒屋敷を拠点に、天下取りへの駒を進めていったのである。

新しい国家を夢見て

天下統一を成し遂げながらも、本能寺で無念の死を遂げた織田信長。農民出身でありながら、天下人の座に君臨した豊臣秀吉。戦国の世を勝ち抜いた英雄たちは、時代の変革者。楽市楽座を奨励し、産業振興を図った信長は、その新たな発想ゆえ巨万の富を背景に上洛を果たし、川並衆をはじめ、船方衆や大工など、一大職工集団を率いて墨俣一夜城を完成させた秀吉は新しい戦法で、天下人への階段を駆け上がっていった…。片や「大うつけ」、方や「サル」と呼ばれた英雄たちは、従来の常識を覆し、周囲の予想を裏切るかのように、新しい時代を切り開いていったのでした。

戦乱の世を変革した英雄たちの新しい発想は、迷走する現代にこそ必要な着想なのかもしれません。江南市は、新国家建設を夢見た英雄たちが青春を過ごした舞台です。きっと、苦難を夢に変えていくパワーが充満していたことでしょう。そんな歴史ドラマを歩いてみようと、江南市へ。名古屋から名古屋江南線を利用して自動車で約一時間。波乱ぶくみのドラマとは裏腹に、開花を待つ桜の蕾が静かに出迎えてくれました。

戦乱の世に咲いたロマンス

尾張の「大うつけ」だった信長が、天下への足がかりをつかんだ桶狭間の合戦。その軍議が行われたのが、生駒屋敷です。周囲には堀をめぐらせ、城郭の機能を有することから、小折城とも呼ばれていました。信長と生駒屋敷を結んだもの。それが、当時夫を亡くして実家へ帰っていた吉乃です。哀しみにくれる美貌の未亡人の姿は、若き信長の心に焔を灯したのです。側室となった吉乃は、信忠、信雄、徳姫の三人の子を産みました。信長と吉乃の結びつきは、美人であったことはもとより、幼少より母の愛を受けたことがなかった信長が、吉乃のもつ母性愛に魅かれたのでしょう。後年、重臣であった佐久間信盛を更迭する冷酷さをもつ信長。変革に追随できぬ者は例え重臣だろうが断罪する。その鉄のような意志と冷酷さは、天下を治める一方で非業の死を招いたのでしょうか。もしも吉乃が生きていたら…。永禄七年（一五六四）、小牧城の築城とともに吉乃は小折から移りましたが、わずか二九歳の若さで病死。冷酷非情な信長も、この時ばかりは一晩中、泣き明かしたといわれています。

戦争に翻弄された戦国の女性たち。吉乃と信長の婚姻もまた、生駒家の財力・武力を一因としていながらも、それだけでは語り尽くせぬロマンスが咲いていたのでしょう。吉乃の墓碑が建つ久昌寺。信長がこの寺に六六〇石を寄進したことからも、信長の愛情の深さをうかがい知ることができます。また、吉乃が病没した田代には経塚が残されており、春にもなれば信長に精一杯つかえた吉乃のように、美しい彼岸桜が辺りを染め上げています。

吉乃の肖像画

生駒屋敷・中門（広間家の門）

生駒屋敷跡

久昌寺

吉乃の墓碑

英雄たちを結んだ絆

吉乃が病没した同じ年。若き日の豊臣秀吉は、宿願の墨俣城築城を成し遂げます。奇しくも、信長と秀吉を結びつけたのが吉乃。「せめて馬の口取りでも」。この口利きがなければ、天下人秀吉はありえませんでした。農民であれ才能さえあれば登用する。信長の鋭い視線は、年功序列が崩壊した現代と同様。小物売りとして全国を行脚した秀吉の情報収集力、また、乱流する木曽川の特性を農民として知り尽くしていた秀吉の才知。兵法だけに長けた重臣たちにはない、平民ならではの才能を信長は早くから読みとっていたのです。その期待に応えるかのように、佐々成政が頓挫した墨俣城を築城。野党さながらの川並衆・前野党や蜂須賀党を率いて用材を確保。木曽川の流路を利用して搬送し、途中、櫓や塀を造りつつ筏で流し、現地で素早く組み立てるという現代工法に劣らぬ工法で城を完成させたのでした。

「川を制する者が国家を制す」。壬申の乱以来、幾多の合戦の場になってきた木曽川を知り尽くした若者たちは、秀吉という大将を得ることで、その底力を遺憾なく発揮することができたのです。

当時の秀吉よりも、多くの配下を擁する蜂須賀小六や前野将右衛門が、相次いで秀吉配下になったのも、秀吉の知謀に自らの夢を託したのでしょう。

気ままにJOURNEY

前野家屋敷跡

前野将右衛門は、信長が整備した柳街道沿いに広大な前野屋敷を有する土豪。一族の記した「武功夜話」は、戦国の知られざる歴史に光をあてる貴重な文献として脚光を浴びています。

この前野将右衛門が兄と慕い、義兄弟の契を結んだのが蜂須賀小六でした。

蜂須賀家は尾張守護代斯波家にゆかりをもつ尾張の豪族。蜂須賀村（現在の海部郡美和町）に育った小六は、信長の父信秀と不仲になり、母の在所である江南の地に移り住むこととなりました。この時彼が住んだのが宮後城。叔父の安井弥兵衛の屋敷でしたが、いつのまにか蜂須賀家屋敷と呼ばれるようになりました。

蜂須賀小六像

織田家と不仲となった蜂須賀小六が再び織田家と関わりをもつようになったのが生駒家です。ここで前野将右衛門や豊臣秀吉と親交を温め、秀吉の家臣として信長の夢に協力していくのですから、これまた人生の妙。信長が一番手に入れたかった男、蜂須賀小六が、終生信長に直接士官しなかったのは、こうした織田家との確執があったからかもしれません。またその一方に見る信長の残虐性が、小六の秀吉士官につながったのかも。ともあれ、激動の下剋上を生き抜くためには、大将をも自らの判断で選ぶという鋭い視線が必要だったのでしょう。

蜂須賀屋敷跡（宮後城跡）

名刹に刻まれる「卍」の家紋

まだまだ尾張の小大名だった織田信長が天下に名を轟かせた桶狭間の合戦でも、蜂須賀小六は活躍しています。彼の任務は諜報活動。三河を越えて進軍する今川勢の動向を伝え、また女や商人に身を変えて今川軍を攪乱することが目的でした。この合戦の後、墨俣築城、姉川の合戦をはじめ、その武功は枚挙の暇がないほど。本能寺の変の後、信長の弔い合戦である山崎の合戦、秀吉と柴田勝家の間で信長の後継者の座が争われた賤ケ岳の戦いでも小六は息子・家政とともに活躍し、秀吉はその功績に報いるため、小六に阿波を与えようとします。しかし、高齢のためこれを辞退。天正一三年（一五八五）には、息子家政が阿波藩主に任命されました。

蜂須賀家政はまさしく名君。検地を実施して藩政の安定を図り、他方では藍、煙草の栽培、塩づくりなどに尽力し、阿波商人の名声の礎を築き上げました。彼が幼少の時代を過ごしたのが、江南の曼陀羅寺。ここで手習いを受け、生駒家からは妻をめとっています。

こうした幼少時の思い出は、阿波藩主になってからも色あせることなく、寛永元年（一六二四）には、宮後の八幡社や常蓮寺、曼陀羅寺の修復・寄進をしています。その後、寛永九年（一六三二）には、曼陀羅寺の正堂を京都紫宸殿の古式にのっとり、修復寄進しています。これらの寺々の鬼瓦に刻みこまれているのが、蜂須賀家の家紋である、丸左「卍」です。

「卍」の旗をなびかせて、木曽川で暴れ回った川並衆の棟梁は、江戸という太平の世を迎え、阿波藩主として後世に名を残す、偉業を残したのでした。

秀吉、信長、小六、将右衛門…。生駒屋敷を中心に江南を駆け回った若き武将たちの、一体誰がこの日を見通していたのか。でも見えないからこそ、未来へ向かって突き進む。そんな勇気と夢が、きっとここには満ち溢れていたのでしょう。そして、その激しいばかりの彼らの生きざまは、現代に生きる私たちに、勇気とは何かを改めて教えてくれているような気がします。

徳島城卍紋入り軒丸瓦

松林山常蓮寺

宮後八幡社本殿

江・南・市・の・歳・時・記

◆江南藤まつり◆

4月下旬～5月上旬

曼陀羅寺公園では、毎年春、藤まつりが開催されます。公園内には見事な藤が美しさを競い、牡丹が大輪の花を咲かせて、訪れる人々の目を楽しませています。期間中、まんだら寺嫁見まつりも同時開催。これは法然上人の命日に行われる旧正月に、過去1年間に結婚した新婦が婚礼当時の姿で、姑に伴われて曼陀羅寺に詣でるという伝統行事を再現したもの。花嫁姿に扮したミス江南らが園内をパレードします。

江南市　EVENT　INFORMATION

《春》4月	五条川桜まつり 江南藤まつり ミス江南等発表会 春の農業まつり	《秋》10月	市民まつり 江南菊まつり
《春》5月	花いっぱい運動 子どもフェスティバル	《秋》11月	市美術展 秋の農業まつり リサイクルフェア 消費者ふれあいプラザ
《夏》6月	文化祭 あじさいまつり	《冬》1月	市民走り初め大会 成人の集い 筆まつり（北野天神社）
《夏》8月	江南七夕まつり	《冬》2月	市民駅伝競争大会

●交通のご案内●

◆名古屋方面からお車をご利用の方

名古屋 ―東名高速道路（約30分）― 小牧IC ―国道41号・155号（約20分）― 江南市

◆名古屋方面から公共交通機関をご利用の方

名古屋駅 ―名鉄本線犬山線（急行・約20分）― 江南駅

●お問い合せ●

◆江南市役所
〒483-8701　愛知県江南市赤童子町大堀90番地
TEL0587-54-1111　http://www.city.konan.aichi.jp

特集
内水対策
その歴史の概要
第一編

近世における悪水問題とその対策

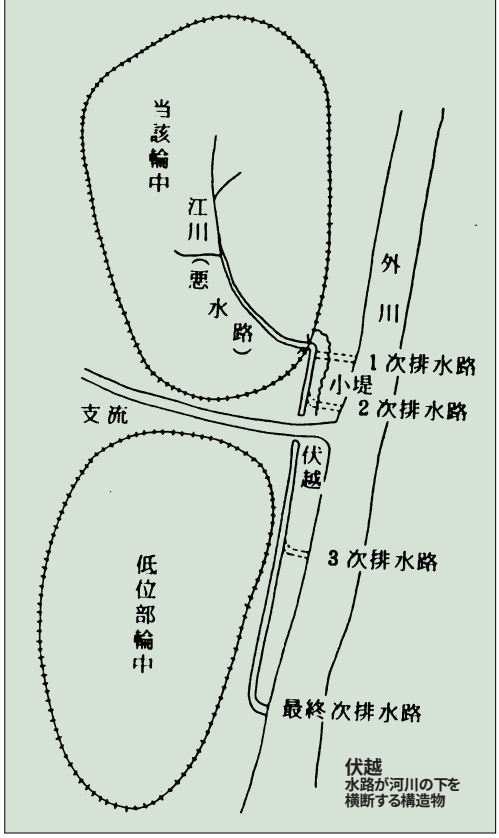
江戸時代、農業振興を目的に形成された輪中は、収益向上をもたらす一方で、内水という、新しい問題を生み出しました。こうした内水排除の対策は、木曽三川下流地帯に点在する輪中地帯の重要な課題。明治期に入り動力排水機が導入されるまで、江下げや伏越しなどの土木工事が行われていました。そんな内水問題やその対策をシリーズで特集。今回は、近世の内水排除を紹介します。

輪中地帯に発生した悪水問題

木曽三川下流域に点在する輪中地域のような低湿地帯では、悪水の停滞による水害が多発し、農業生産などに大きな影響を与えてきました。悪水とは降水などによる水が不必要に多く滞留し、排水する必要がある水のこと。悪水は河川の氾濫に起因する水害と区別するためにも、内水被害と呼ばれています。

こうした悪水を放出するのが排水路です。広義からみれば大小の河川はすべて排水路であり、山野の集水が海に注ぐ自然の水路でありますが、ここで言う排水路とは人工による水路のこと。つまり、耕宅地等に必要のない余水が低地部に集中し、自然に放任すれば内水被害に発展するため、悪水路・下水溝・疎水・下水道・暗渠・伏越等を設けてこれを河川に導き、水害を軽減する目的から施設したもので、古くから漸次発達してきました。なお、用水路を利用し、排水路を兼用したものも歴史的に見れば少なくありません。この場合、用水の引用は水路に井堰を設けて灌漑をしていました。しかし、環境保全が社会的テーマとなった現代では、兼用の水路はほとんど姿を消しています。

悪水路の江下げ、伏越のモデル（図1）



悪水停滞の要因

内水問題が深刻化したのは近世以降のこと。一七世紀、農業振興を目的とした輪中が相次いで形成されはじめたころからです。輪中が形成される以前には、河川が洪水時に上流から運搬する土砂は自然に堆積し、悪水といった問題は大きく起こりませんでした。ところが輪中を形成した後は、破堤による砂入を除けば、輪中内部に土砂が堆積せず、河川敷地に堆積するようになりました。輪中自体が懸廻堤という構造物で守られていたからです。しかも、河川は曲がりくねって流れるため、流速があまりないので、河川が運搬する土砂のうち、河川敷地に堆積する量は増加します。こうして、輪中の内部の高度は河川敷地ないしは河床に対して相対的に低下することになり、この高度差が悪水停滞をもたらす大きな原因となりました。つまり、輪中内より輪中外の河川水位の方が高いため、悪水の放出は困難となり、排水口を開けば輪中内へ河川の水が逆流することもありました。

とはいえ、平水時に悪水を堤外の川へ排水できないことは必ずしもありません。洪水時ないしそれに準ずる河川水位の高い時に悪水の排水が困難となり、しかもそのような河川水位が高い状態が数日以上も継続すると、水田に大きな被害が生じたのです。具体的には田植えをした後の梅雨、及び稲の開花時や収穫時に襲来する台風によってこのような災害が発生しました。

掘抜井戸の普及と株井戸

江戸時代後半に出現した掘抜井戸は、新たな悪水問題を引き起こす原因となりました。悪水の供給源の一つは雨水ですが、この降水量は輪中形成前後で同一ですから、悪水供給量の増加にはつながりません。問題となったのは、井戸水からの供給量の増加です。

輪中地域はその地形、地質の特性から地下水が豊富であり、掘抜井戸を掘れば自噴する特徴をもっており、寛政年間（一七八九～一八〇一）ころから、普及しました。掘抜井戸の登場は、輪中地域の生活と農業に有益な効果をもたらす一方、同一輪中下流部に悪水が集中するという現象を引き起こしました。

この問題の解決策が「株井戸」制度です。掘抜井戸の制限や井戸水放出の時期を制限するなど、悪水被害を防ぐため、上流部と下流部で協議の末、さまざまな約定がかわされました。

近世の悪水排除対策

悪水排除のために近世にとられた対策は二つ。その一つは積極的に悪水排除をよくするための工事を施すことで、今一つの対策は消極的に悪水停滞の害を少しでも軽減しようとする対策です。

動力の排水機場が整備される以前の積極的な対策は、自然に流下する排水路の流下条件を改良することのみでした。すなわち、それまではその輪中の圦の傍らで堤外の川に悪水を排出していましたが、河床の上昇でそれが困難

になると、その排出口をより下流部まで延長して(江下げ)、そこで河川へ放出しようというものです。この土木工事は各輪中の性格により異なりますが、基本的な論理は全く同じことでした。こうした江下げの工事に必要になってきたものは次の二点です。

まず第一は、江下げをする場合、堤外の河川の河床が次第に上昇するため、経年的に二回、三回と、より下流部に江下げをしている。第二としては、その江下げの計画流路上に河川またはその分流がある時、その河床を潜らせて(伏越)江下げをしていること。この伏越は必要な場合には三回も施されたケースもあります。(図1)は伏越を模式的に示したものです。伏越をしてきた輪中は以下の通りです。

●揖斐川左岸

大垣輪中、祖父江輪中、烏江輪中、太田輪中。

●長良川右岸

河渡輪中、結輪中、森部輪中、牧輪中。

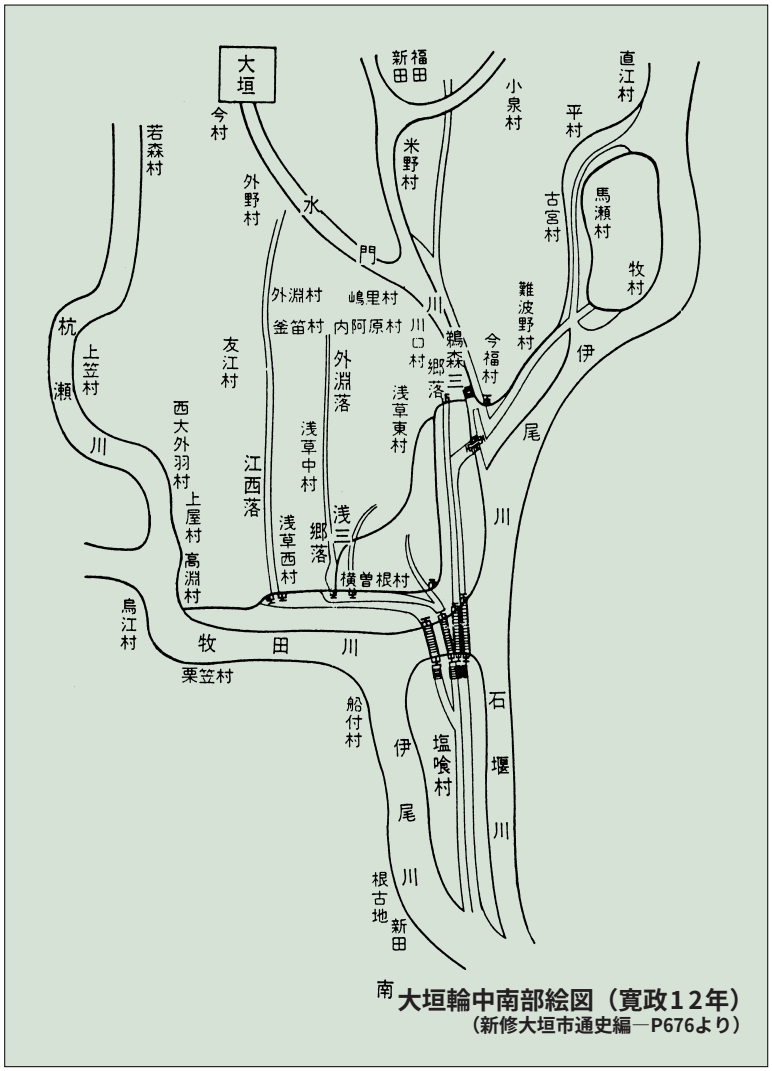
●長良川左岸

加納輪中。

大垣輪中の江下げ

大垣輪中では、北部よりの悪水を揖斐川に排水しようとして、永禄四年(一五六一)、大垣市船町より今福までの延長八kmに及ぶ水門川が開削されました。しかし、増水時には河の水が水門川に逆流するため、慶安四年(一六五一)に水門を設け、逆流を防ぎました。その結果、悪水は輪中内にあふれ、その上、土砂の堆積によって揖斐川の河床は上昇し、いっそう排水は困難になりました。南部低位部の村々では収穫が皆無の年さえあったほどです。

そこで、各村々は下流村々の地所を借りて悪水路を延長し、輪中南部の横曽根地内で、揖斐川に放出することとしました。しかし揖斐川や牧田川の土砂は年々その河床を高め、排水は年々困難になったので、ついに二km下流の鵜森で揖斐川底を伏越し、さらに排出路を二・五km下流に延長させ、多芸輪中の根古地で牧田川に放流するようにしました。これが「鵜森伏越樋管」や「鵜森排水路」と呼ばれるもので、天明七年(一七八三)に完成しました。このように、江下げをする場合、他村の地所を借りるため、毎年相当の江代込めを地元村々に支払っていました。



大垣輪中南部絵図（寛政12年）
（新修大垣市通史編―P676より）

輪中の姿を一変した動力排水機

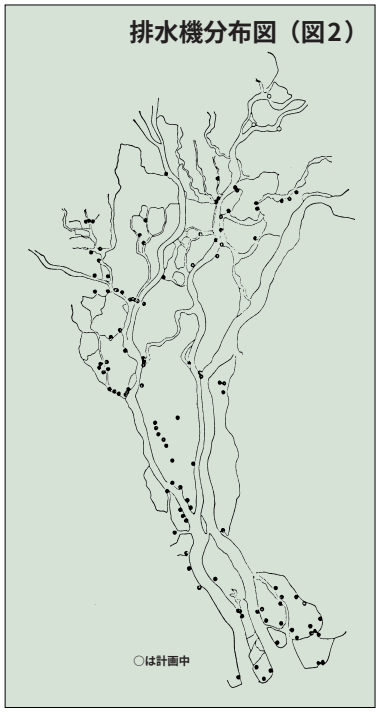
悪水をめぐる同一輪中内の上流部と下流部の対立は、明治末期から大正時代まで続いたようですが、動力による排水機が設置されると、次第に消滅していきました。

動力排水機が輪中地域に導入されたのは明治二七年(一八九四)のこと。多芸輪中大牧の高柳新田(現、養老町内)に設けた水連式蒸気機関の排水機が、東海地方の第一号(新潟県に次いで日本で二番目)です。この地域は「豪雨三日に亘れば、水満々として美田はたちまち一面湖水と化し、収穫を迎えた豊穣も一夜にして皆無の悲況を呈すること少なからず」という状況でした。この排水機は「予想以上の良成績を収め、本邦における機械排水の第二位の古き歴史と実用的効果を確認せられ、低湿地農業に一大改革を与えたり」というほどの効果をあげました。

その後、安八郡森部輪中にも設置。やがて明治中期以後の濃尾低湿地排水改良の基本手段となりました。

昭和四七年現在では、(図2)のように排水機場が設置されています。この図から排水機が輪中全般に点在しているが、特に高須輪中や多芸輪中に多くみられます。木曽三川の下流地帯、及び輪中内の下流部での悪水問題が深刻だったといえましょう。

明治時代に入り積極的に導入された排水機は、輪中の悪水問題を軽減するとともに、輪中特有の農業スタイルであった、堀田も姿を消すことになりました。



排水機分布図（図2）

大巻ポンプ場(右上の鉄筋2階建)とその左下に明治27年、東海で初めて建設した排水機のレンガの基礎が残っている(岐阜県養老町大巻)

■参考文献
『輪中その展開と構造』
安藤萬壽男著昭和五〇年古今書院
『木曽三川〜その流域と河川技術』
昭和六三年建設省
『岐阜県治水史』　昭和五六年岐阜県

輪中と悪水湛水

造盆地運動と地盤変動
水損不作と亡失田
堀田造成への道

伊藤 安男氏

略　歴

立命館大学文学部地理学科卒、花園大学名誉教授、文学博士、岐阜地理学会会長、岐阜県古地図文化研究会会長、歴史地理学会評議員。

主なる著書

『輪中』、『ふるさとの宝物　輪中』、『変容する輪中』、『治水思想の風土』、『地図で読む岐阜』など多数。

輪中地域の災害をみたとき、破堤入水による外水氾濫もさることながら、悪水湛水による内水氾濫がより大きな被害をもたらした。

江戸期の『濃州徇行記』の安八郡の記述によると「…誠に悪水の輻湊する處故例年水損する事多し、去るにより小百姓ばかりにて貧村なり…此田面年毎に水の為に敗傷し、又初より植付もなりがたき事あり、されば旱年ならでは田實がたし…又深溜の時は畠上までも水のる事多し…」とか、「…平日壱尺四寸ヨリ貳尺余モ水湛有之候」とみえている。

この常襲的な水損不作を防除するため生まれたのが、輪中景観の点景ともいうべき「堀田」の造成であり、「悪水吐圦樋」の築立、さらには独特の水利慣行「株井戸」や、「江下げ」をめぐる水論などである。

造盆地運動と地盤変動

内水災害の常襲化には様々な要因があげられるが、その一因としてフィジカルな地殻運動があげられる。具体的には濃尾傾動地塊運動の一環としての地盤沈降がある。これは東部の尾張丘陵から各務原台地にかけては隆起し、木曽三川合流する西濃平野は沈降するという東高西低の造盆地運動は、千年に一・七メートルの恒常的沈降量で現在も進行中である。①

この地盤変動は地震時にはさらに促進される。例えば明治十八（一八八五）年に中山道筋に設置された一等水準点で、明治二四（一八九一）年の濃尾震災後の明治二八年にその変動量を調査した結果、揖斐川左岸の本巣郡巣南町では三〇八ミリの沈降量に対して、各務原台地の各務原市那加では七六七ミリの隆起が認められている。②

このような変動は江戸期の史料にもみられる。本阿弥輪中（岐阜県海津郡海津町本阿弥）の安永五（一七七六）年の文書に「…七十年以前宝永四亥年十月大地震にて田畑共地面一尺余ゆり下り、夫より年々と水損勝に御座候…」とあり③　宝永四年の地震により約三〇センチの沈降をしたため、本阿弥輪中は水損場となり亡失田となろうとしていることが記されている。このフィジカルな事例は木曽三川地域に共通してみられ、外水氾濫と連動して輪中開発が進行していく。

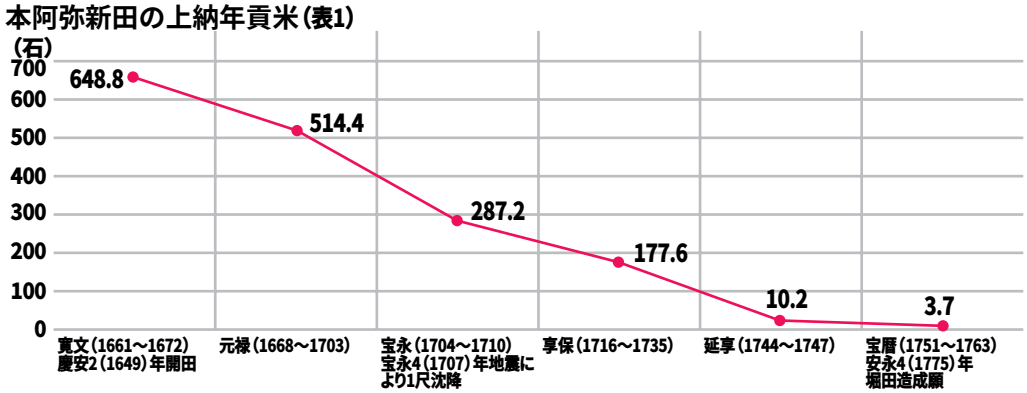
水損不作と亡失田

輪中形成過程の初期は上流部のみを水除堤で防御する尻無堤（馬蹄型輪中）をもち、下流部を流作場とする築捨の段階が一般的であった。それが江戸中期以降になると流作場にも逆水がおよび浸水被害が激化する、その対応として尻無部分に新規に水除堤を築いて懸廻堤の輪中となる。或いは従来は村囲いの水除囲堤の輪中堤をもたなかった集落も隣接する村々との水論の上、新規に輪中堤を築立てていく。

このような開発道程は結果的には、遊水地的機能をもつ土地空間を縮小させ河道を固定することとなるが、これが河床上昇の天井川となり自然排水の障害となる。また懸廻堤の輪中堤築立は外水災害に対応するものであるが、反面では排水上の問題から内水災害を激化させる一因となる。いうならば輪中開発の矛盾である。

史料にも「…伊尾川通、木曾川通、川床高く相成、悪水吐差支、年々打続水損にて…」とか「…伊尾川通川床高相成、圦先水吐差支申

本阿弥新田の上納年貢米（表1）



伊藤信『本阿弥新田史』（大正11年）より　伊藤安男作成

※年貢米の石数は各年代の平均値

候故、年毎に水損相増、立毛生立不申候…」また「…当村之儀、夏冬地面に三尺より四尺迄之水湛へ…」とある。④　この河床上昇の科学的数値について高須輪中の成戸量水標地点で明治二十（一八八七）年から昭和二七（一九五二）年の六五年間に一八五センチの上昇が報告されている。⑤

悪水湛水の状態を古文書では、水腐場、水損場、亡所田、亡失田と記している。水損不作がいかに悲惨なものであったかを、輪中の各村の上納年貢米からみてみよう。

表1は本阿弥新田（本阿弥輪中）の上納年貢米の変化を表すグラフである。開田は慶安二（一六四九）年である。当初の寛文年間（一六六一～一六七二）に六四八・八石上納したものが、約四十五年後の宝永年間にはその半分以下の二八七・二石と減少し、さらにそれより五十年後の宝暦年間には三・七石という想像を絶する激減にて亡失田と化している。

また高須輪中の馬目村（岐阜県海津郡海津町馬目）では正徳元年から享保五年（一七一一～二〇）に二六二・四石を年貢米として上納したものが、約百年後の天保二年から同十一年（一八三一～四〇）には約三・五分の一の二七・八石となっている。同輪中南部の石亀村でも寛文元年から同十年（一六六一～七〇）に二二・三石の上納が天保二年から同一〇年（一八三一～三九）にはなんと六分の一の三・七石と減少している。⑥

このような反当収量の激減は「一村及亡所」とあるように村々は困窮化して潰百姓の続出、高持層の耕地放棄による無高への転落や奉公人として村外への出稼ぎなどムラは崩壊寸前であった。この水損不作の窮状を克服するために考案されたのが堀田の造成である。

堀田造成への道

堀田造成をいつ誰が提唱したかは不詳であるが、その一人として考えられるのが美濃郡代支配下の本田陣屋（岐阜県本巣郡穂積町本田）の代官、川崎平右衛門があげられる。

彼は宝暦治水の大榑川洗堰により長良川の常水位が上昇したため、対岸の桑原輪中が排水不良となった。これを防除するため排水樋門を増設する「三ツ分御普請」を行い、さらに堀田造成について次のように提唱している。

「…田方之儀者揚田ニいたし、地高ニ仕立候ハヽ、水難相遁可申候、上ヶ田と申者、たとハ横壱間之内三尺通り捨り地ニいたし、此土を以壱尺堀上候得者、壱尺高く成、貳尺堀上ヶ候得者、生地貳尺高く成候…」⑦　とあり、それをうけて桑原輪中南部の小薮村（小薮輪中、羽島市桑原町小薮）では、宝暦五（一七五五）年に目論見を始めていることが次の史料から知られる。「濃州中島郡小薮村田畑堀揚御普請目論見帳」、「濃州中島郡小薮村田畑堀上御普請絵図、宝暦五年」⑧　などがそれである。

これ以降に堀田型の土地利用は盛行されていく。例えば寛政年間（一七八九～一八〇〇）の『濃州徇行記』にも輪中の各村々に堀田の記述がみられ、また同年代の地方書『地方凡例録』にも「堀田敷引」として「是は稀にあることにて水田湿地の類にて田場一面に稲作を仕付れば水腐して作毛生立ざる所は島田の類に田の内を堀上げ畔を立て、堀上たる高ミに稲作を仕付、堀たる跡は水溜に成りて仕付成がたし…」とある。

田舟型堀田復元図―浅草輪中（大垣市浅草）―（地籍図より伊藤安男作成）

田舟型堀田空中写真―浅草輪中（大垣市浅草）―（1947年米軍撮影）
『大垣市遺跡詳細分布調査報告書―人文地理学編―』大垣市、1997年より

■引用文献
①桑原　徹「濃尾盆地と傾動地塊運動」第四紀研究七　一九六八年
②多田文男　井関弘太郎『濃尾平野の地形構造と地盤沈下』八二頁　総理府資源調査会　一九五五年
③伊藤　信『本阿弥新田史』四一頁　佐野猪之助　一九二二年
④前掲書③　三七頁　四三頁
⑤井関弘太郎「木曽、長良、揖斐川の河床高変化」名古屋大学文学部研究論集四四　一九六七年
⑥北村厚史「輪中地域における堀田の史的研究」岐阜史学七七　一九八三年
⑦『高翁家録　川崎平右衛門定考事績録』
⑧『高木家文書目録』巻三　九二〇頁、名古屋大学附属図書館　一九八〇年

民話の小箱

清水のお菊

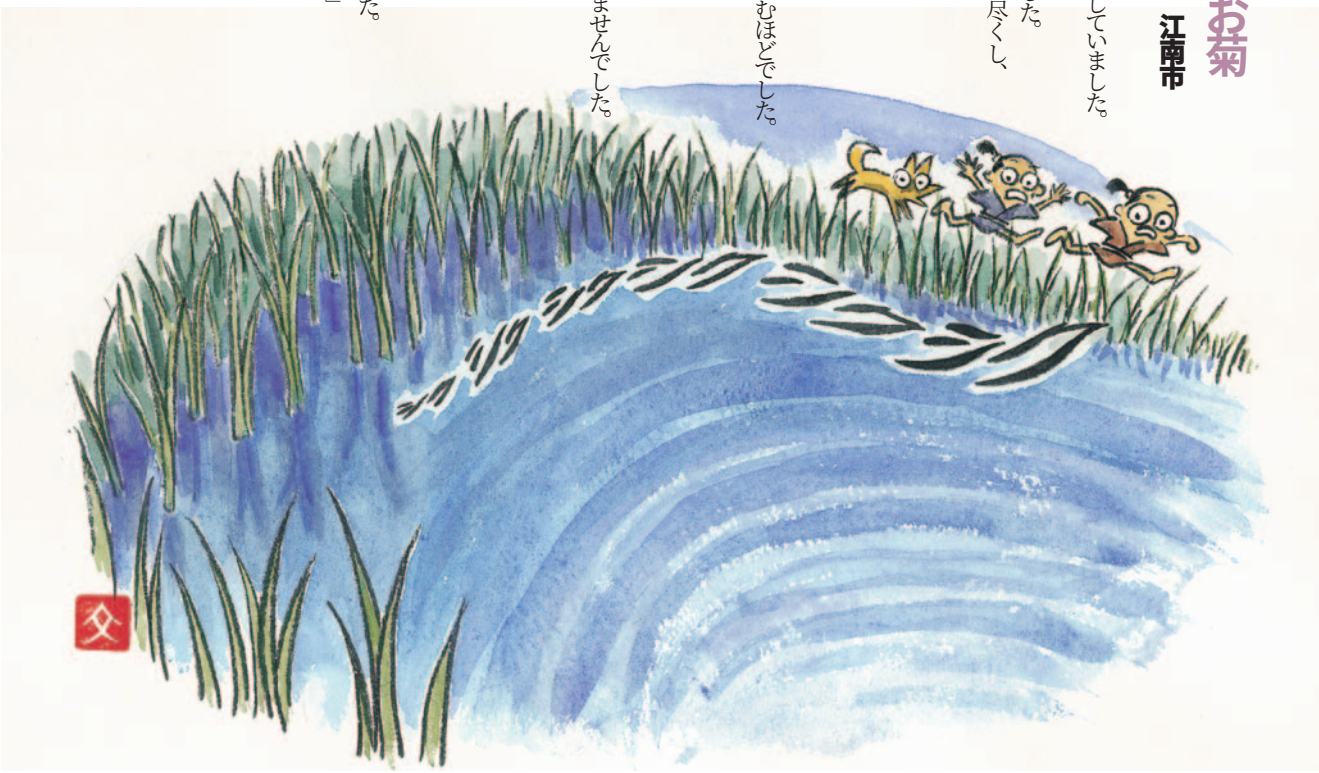
江南市

風雲急を告げる幕末のころ
前野という集落では、年中こんこんと清水が湧き出していました。
澄みきった清水は、
「前野の清水」とか「井出の清水」とか呼ばれていました。
このころの清水の辺りは、一面をススキやアシが埋め尽くし、
昼でさえ恐ろしいようなところ。
さやさやと野を渡る風に入り交じるように、
女のかぼそい泣き声が聞こえてくると、
人々は恐ろしげに語り合っていました。

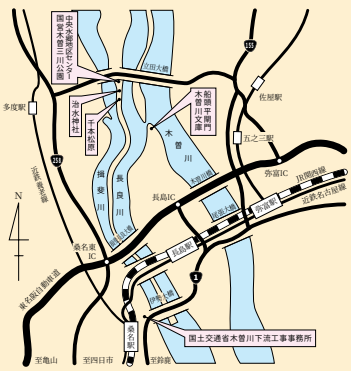
泣き声の主は、お菊という、とても美しい娘でした。
りりしい青年武士と恋に落ち、その仲は人もうらやむほどでした。
しかし、女心と秋の空。
美貌のお菊には、他にも想いを寄せる青年もあり、
いつしかお菊は心変わりをしてしまったのです。
そんな心変わりに気づいた青年武士は、
お菊の心を自分へ引き寄せようとしましたが、叶いませんでした。
深く心に傷を負った青年武士はやがて悪鬼となり、
寂しげなススキ野を行くお菊を待ちぶせてあやめ、
前野の清水に投げこんでしまいました。

このことがあってから、
清水では哀しげな女の泣き声とともに、
お菊の亡霊が現れるという噂がたつようになりました。
「恐ろしいぞ、前野の清水、死んだお菊が化けてでる」
人々はこう口々にささやきあい、
お菊の物語を伝えてきました。

現在、前野の清水は枯れてしまい、
清水の跡には悲恋のお菊を見守るように、
お地蔵さまがポツンと立っています。
現在、江南市では「前野の清水」を活用した
「しみず公園」が計画されています。



木曽川文庫利用案内



《開館時間》午前9時～午後4時30分
《休　館　日》毎週月曜日・祝祭日・年末年始
《入　館　料》無料
《交通機関》国道1号線尾張大橋から車で約10分
名神羽島I.Cから車で約30分
東名阪長島I.Cから車で約10分

《お問い合わせ》
船頭平閘門管理所・
木曽川文庫
〒496-0947 愛知県
海部郡立田村福原
TEL(0567)24-6233

編集後記

弊誌では、読者のみなさんの声で構成するコーナーを企画しています。身近で起こった出来事、地域の情報などをお知らせください。

宛先　「KISSO」編集　FAX.(0567)24-5166

木曽川のコハクチョウが例年より早く北へ帰っていきました。今年は去年の半分の11羽しか確認されませんでした。数が減っている原因が気にかかります。

今号の編集にあたって、江南市のみなさん及び伊藤安男氏に大変お世話になりました。お礼申し上げます。

次回は、桑名郡長島町を特集します。

木曽川文庫ホームページ
http://www.kisogawa-bunko.cbr.mlit.go.jp

●表紙写真●
上：尾北自然歩道
下左：木曽川を望む　下右：曼陀羅寺正堂

『KISSO』Vol.42　平成14年4月発行
発行：国土交通省中部地方整備局木曽川下流工事事務所　〒511-0862三重県桑名市播磨字沢南81　TEL（0594）24-5715
木曽川下流工事事務所ホームページ　URL　http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu
制作：財団法人河川環境管理財団　〒450-0002愛知県名古屋市中村区名駅四丁目3番10号（東海ビル）　TEL（052）565-1976